

その男、砲雷長につき。

べらんべえ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

豊後誠（とよのちまこと）。

謎の攻撃により、沈んでしまった護衛艦の砲雷長だった彼は、なんと50年後の海岸で目を覚ましたのだった。

そんな彼に待っていたのは艦娘と名乗る女の子たちとのドキドキ（闘争的）な毎日。はたして誠は無事に元の時代に帰れるのか!?

# 目次

第0艦、序章の中の序章	1
第1艦、50年後の日本へ、出会いの始まり	5
第2艦、海岸。	20
第3艦、響、見つめる者は	28



# 第0艦、序章の中の序章

〈2066/08/12/23:46 | 響〉

「うー、響ー……こ教えてー!」

教科書を開いて何時間目だろうか、暁型駆逐艦一番艦、暁は、妹である暁型二番艦、響に足をばたばたさせながらごねた。

「……ここはね、両辺にルートをかけてエックスに付いてる乗数を外すの」

いま彼女達が解いているのは、皆さんご存知二次方程式だ、解を出すのになかなか手こずったという方も多いだろう

「??響、日本語話してる?ロシア語話してない?」

「……現実逃避はやめなよ」

あきららかに逃げている暁に対して、響はじつと見つめる。

「うっ……、に、逃げてないもん!!」

「目が泳いでる」

「うっ……」

さつきからずつとこの会話の繰り返しである、いい加減ラチがあかない

「暁、早くしないと電と雷が帰ってくるよ？」

「ここにいない二人、暁や響と同じ、同型の姉妹艦の電と雷のことだ。」

「うー、だって二次方程式すごく難しいんだもん！これじゃ宿題おわんないよー！」

「だからわざわざ手伝ってるんじゃないか」

「そう、彼女達が必死にやってるそれは、地獄の紙切れ、宿題だ。」

「だからつてごねても宿題は終わらないよ」

「うー！」

さつきは一次方程式でつまっていたのに、こんどは二次方程式だ、いったいいつになつたら終わるのだろうか、響は嫌気がさしてきて、窓の外を見つめた。

「すごく綺麗な三日月だった。」

「2016/07/11/15:26」ひびき

船が意思をもつなんて、この人たちは考えたことすらないんじゃないかな。

私の名前はイージス護衛艦DDH-192ひびき。音響測定艦じゃないよ、護衛艦だよ。

「本日、自衛隊創設以来初の、アメリカの領海を護衛するためにここ呉基地からイージス護衛艦、「ひびき」が、5日間の航海に出発します！」

「帽ふれー」

今日から私は初の本格的海外支援に赴くのだ。一緒に訓練してきた仲間（船員）と共に。

「……頼んだぞ、ひびき」

そういつて私に語り掛けてくる人は一人しかいない。

「CIC、艦橋。豊後、状況報告」

「現在、予定より二分遅れで進行中、それ以外に問題はなし」

「了解」

豊後誠一等海佐、私の大好きな人で、私の砲雷長。

私に最初から乗っていた人。私の事を私以上に使いこなしてくれる、私だけの砲雷長。

「対水上戦闘よおい」

誠さんの号令と同時に、戦闘は始まる。

「対水上戦闘よおい、これは演習である、繰り返す、これは演習である！」

さあ今日は最終訓練だ、こんごう姉さんに遠慮なくぶっぱなしちゃうよ！

「トマホーク、攻撃始め!!」

復唱の後、私のVLSから、対艦用ミサイル、トマホークが発射される。

「よーし、こんごう、しつかり防いでくれよー」

誰かがそう呟いたそのとき。

バツコオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

(船) 体に何かあたって、しかも私に大穴を開けて。

「な、何が起きたーっ!!」

「砲雷長!海中からの魚雷です!」

……これが、世界で初めて目撃されたヤツら、後には何十年と続く戦いの発端となつたヤツら。

いくつもの船を沈め、人類を絶望に陥れた。

「深海棲艦……?」

誠さんは、ふと呟いた



# 第1艦、50年後の日本へ、出会いの始まり

〈2016/07/11/15:31 誠〉

「な、何が、起きた!？」

港を出て僅か5分、CICでうとうととしていた俺の目を覚ますかのように、突然、爆音と衝撃が走った。

「こちら機関室!穴です!いきなり船体に穴が空きました!」

「攻撃か!?一体どこから……!」

「負傷者多数!!……あ!桜田……!!」

ブツツつと無線が切れる音が艦内に常設されたスピーカーから響く。

「CIC、艦橋!!損害報告!」

今度は入れ替わりで艦橋から放送がかかる。

「船内機関室にて謎の爆発!恐らくアンノウンからの攻撃!」

「バカな、ソナーは反応しなかったのか!!」

それもそうだ、そもそもソナーに感が無かったのはなぜだ?中国製ならまだしも、ひびきに積んであるレーダーは純日本製のスパイレーダーだぞ。

「一才反応はありませんでした、完全にグリーンです！」

マジかよ、じゃあ乗り上げたか？いや、ここらは一才岩礁はなかったはずだ、だったらなぜ……！」

「レーダーに感あり！」

俺の思考を遮断するかのように、新たな情報が入る

「艦船か？魚雷か?」

「この速度は……魚雷です！艦尾方向から2本!!広がりつつ接近!!」

ソナーの声を聞いた俺は急いで艦内マイクを取る。

「武鐘発動、対潜戦闘よおおおい！」

「対潜戦闘よおい！これは演習ではない!!繰り返す、これは演習ではない!!」

この台詞を訓練以外で言いたくはなかったが、俺は急いでマイクのダイヤルを機関室前廊下にセットする

「ダメコンA班、CIC！状況報告!!」

「火災完全に鎮火！ただ、機関室の中にまだ乗組員がいます！」

「了解！引き続き頼む!!」

「了解！」

次だ、俺はソナーに近づく。

「ソナーどうだ、相手の魚雷は」

「……確かに魚雷ですが、変です、探信音がしません」

「探信音がしない？本当なのか？」

「妙だな、そう、思い今度はダイヤルを艦橋にあわせる。」

「艦橋、CIC！副長お、目標からの探信音なし！目視による確認を具申します！」

「探信音がしない？本当なのか砲雷長？」

「自分でも確認したが、間違いない、恐らく」

余裕な会話もここまでだった。

「砲雷長お！前甲板VLA解放！アスロック飛翔中！」

「なんだと!？」

「誰だ!?!この忙しい時にアスロックなんて……!!」

いや、検討はついてる！

俺はそいつのもとに駆け寄って胸ぐらを掴みあげる。

「西村あ！テメエ、何勝手に撃つてやがる！一人でアスロック撃つバカがどこにいるんだ！」

「お、御言葉ですが、やらなければ、やられます砲雷長！」

やばい、西村の目がマジだ。

たしかにそれは正論だが、言い返す前に怒号が響く。

「C I C、艦橋！豊後！誰が撃てとிட்ட！さっさと自爆させろ！」

「……！了解！」

自爆ボタンを押した俺は立ったまま半（狂）笑いの西村を見ながら叫ぶ。

「こいつをC I Cから叩き出せ!!」

西村が出ていくのを見届けた俺は、急いでソナーになおる。

「ソナー、魚雷までの距離しらせ！」

「本艦との距離、150ヤード！後10秒で接触します！」

近い！

言い終わると同時に、C I W Sの銃声と回復した機関音が同時に響き、艦橋から放送が入る。

「各員衝撃に供え!!」

避ける気か、無理だ、探信音がしないとはいえ、魚雷が磁気信管なら……!!

「接触まで6秒！」

ひびきを信じなければ……!!

「5秒!!」

頼む

「4秒!!」

避ける

「3秒!!」

頼む……………!

「2秒!!」

避けてくれ!

「1秒!!」

ひびき!!

「ぎよ、魚雷全弾回避!!!通りすぎていきます!!」

「よっし!出せる限りで最大船走!逃げるぞ!!」

かわしてしまえばこつちのものだ、さっさと離脱しなければ

「最大船走お!」

先ずはハワイまで逃げ切らなければ、報告はそれから

「新たな魚雷音接近!!」

何!?

「どこからだ!!」

「……!本艦の真下です!」

次の瞬間、ひびきの船体は真つ二つに折れた。

く2016／07／11／15：42 | 誠く

(くそ、体が動かない……！)

気付けば俺は、海の中にいた。

(他の連中は……)

回りを見ると、海面に何人か浮かんでいる。

(他に沈んでいるヤツは……！)

まわりを見渡したが、どうやら沈んでいるのは俺だけだ。

(……俺だけならいいか)

不思議と死の恐怖はなかった。

むしろこの冷たさが心地よい。

(……ん?)

誰かくる、潜ってくる。

(誰だ、くるなよ)

沈んでいく俺の方に必死に向かってくる。

やがて息が続かなくなったのか、泡を拭いて口を抑えながらこっちにくる

(……ああ、幻覚でもみてんのか俺は)

そんなことを考えていると、

(誠さん！)

(誰だ……？)

(手を伸ばして!!諦めないで……!)

(女の娘……？)

(いかないで誠さん！)

気がつくとも俺は、その娘にむかって手を伸ばしていた。

(まだ死んじゃだめ!生きて!!)

どんどん光が薄くなっていく、気付けば海面があんなに遠くなって……

(手を掴んで!!)

言われるがまま、俺は手をつかんだ。

(いよっし……!!!)

そこからの記憶はない。

く2067／08／13／00:12 | 響く

ようやく終わった。

響はベランダにでて、うんと背伸びをした。

「響ちゃん、お疲れなのです」



そういつて隣にすわつて、お茶を出してくれたのは、電だ。

「ああ、ありがとう」

受け取つてそれを一気に飲み干す。

「ん……ありがとう電」

「どういたしまして、なのです」

そこから先は二人とも何も話さなかつた。

ただお互いに寄り添つて空を眺める、いつもの二人の日課だつた。

だが、今日はちよつと違つた。

「あのね、響ちゃん」

「ん？なんだい？」

電が口をゆつくり開いた。

「電ね、明日から超長期間の遠征に行くことになつたのです」

「え……」

あんまりにも突然の通告だったので、響は情けない声を漏らしてしまつた。

「それつてどういう……！」

説明を求める前に、響の口は塞がれた。

「ん……ちゅ……」

「い、いならずま……」

唇が剥がれた。

「だからね響ちゃん」

まっつてよ、それじゃまるで……!!

「いならずまのこと、忘れないで欲しいのです……」

そういつた電の顔は、涙で、濡れていた。

超長期間の遠征任務、それは艦娘達の間でも有名だった。

一番死ぬ確立が高い任務。

として。

「電、まっつてよ、なんで急に……!!」

「前から司令官とお話して、二人で決めた事なのです」

そんなのきいてない!

響は何回もかぶりを降った

「響ちゃんには伝えたかったのです、私の気持ちを」

「嫌だ!」

響は電に抱き付いた。

く2067／08／13／04：39 響く

「電！」

響は布団から勢い良く起き上がった。

「あ……」

また、この夢か。

響は頬に伝わる涙をこすって、自分の部屋を見渡した。

「みんな、沈んじやったもんね……」

なれたつもりだったが、やっぱり寂しいみたいだ。

起床まで、まだ幾分か時間があるので、気分転換に響は廊下にてた。

「あ、響ちゃんおはよう、早起きだね！」

そういつて笑顔で語りかけて来るのは、吹雪だ。

「吹雪こそ早起きだね」

「うん、もうトレーニング終わって、今からお風呂！」

「そう」

「よかつたら響ちゃんも一緒に入る？」

「え？」

「だって汗すごいよ?」

どうやら響は自分でも気付かないうちにもものすごい汗をかいていたようだ。

「……うん、入る」

響の返答に、吹雪はニツコリと笑った。

〈2067/08/13/04:45〉響〈

「あー、響ちゃんいい臭いー」

「吹雪、熱い」

そういつて離れようとはするものの、浴槽に浸かりながら、がちりと響をホールドして離さない。

「響ちゃん」

ホールドはそのまま、吹雪は突然、大人びた声で語り始めた。

「また一人で泣いたでしょ?」

「っ……」

見抜かれてる。

「いいんだよ、無理しなくて。泣きたいときは誰かに泣きついてもいいんだよ」

優しく語るその口調は、雷そっくりだった。

「……うん、ありがとう」

響の返答に、また吹雪はニッコリと笑った。

く2067／08／13／04：45「響く

「ふいー、朝風呂は最高だねー、やっぱり！」

牛乳を飲み干した吹雪は出口に歩き出す。

「じゃあ私は部屋に戻るね!!」

「うん」

短い返事をして、響も牛乳を飲み干した。

「吹雪」

出口に向かっていていた吹雪をひきとめて、名一杯叫んだ

「ありがとう!!」

「へへっどういたしまして!」

そして、照れくさそうに、今度こそ吹雪は立ち去っていった。

く2067／08／13／04：50「響く

響は海岸を歩いていた。

特に目的はなく、ただ単に散歩をしているだけだ。

「うーみーはひろいーなーおーきーいなー」

何となく歌を口ずさんで見たが、やっぱり静かに歩く方がいい。

「綺麗だな……」

水平線を見ながら、響は姉妹達に話しかけるかのように、目を瞑った。どのくらいそうしていたか分からないが、響はあることに気がついた。

「ううん……」

誰か倒れてる、しかも片方は艦娘だ！

「ちよ、ちよつと大丈夫かい?!」

慌てはその娘にむかって走りよる。

「うう……」

「なあ大丈夫かい?」

とりあえず揺さぶってみたが、反応はない。

「……じゃあ、仕方ないかな」

そう自分に言い聞かせ、響は艦娘の上に馬乗りになり、唇を近づける

「うーん……」

そして目前まで迫ったその時。

「……あれ?ここは」

彼女が目を覚ました。

「……おはよう」

「あ、どうも……」

「……………」

「……………」

二人の間に微妙な空気が流れる。

そしてそれは沈黙を破ったのは……

「ぎにあああああ!!お、襲われるうううう!!」

「だ、誰が襲うかああああああああ!!」

二人の悲鳴にも近い叫び声が、鎮守府に響いた。

## 第2艦、海岸。

〈2067/08/13/04:50 誠〉

「ぎにあああああ!!お、襲われるううううう!!」

「だ、誰が襲うかああああああああ!!」

突然の悲鳴に、俺は飛び上がる。

「な、なんだ!」

あたりを見渡してみれば、中学生くらいの女の子と、小学生くらいの女の子がなにやらもめているようだ、お互いに腰が抜けてるのか、非常に間抜けな光景である。

「だ、だから誤解だと……!!」

「言い訳無用よ!現に貴女今さつき私に乗り掛かってキスしようとしてたじゃない!」

「いや、それは人工呼吸をしよう……!」

ああ、状況を察せる自分がおそろしい。

「じじじ人工呼吸!?そそそそんな同性に向かつてよくも……!」

「いま私の事を同性愛者か何かと思つたらう!!」

「違うの!」



「失礼な!!」

このままでは、俺にとって何もいいことがない。

一瞬可愛いとか思ったがさすがにまずいのでいい加減に止めるか。

「おい、何があつたかは知らんが、そのくらいに……!」

と、いいかけたその時だった。

俺は背後に異様な殺気を感じ、とつさに横に逃げた、その直後だった。

「ぐうー!」

俺が今のさつきまで座っていた場所に、どでかいクレーターが出来る。

「一体何が……」

見渡してみると、さつきまで喧嘩していた二人組は、突然の事に対応出来ず、口を開けてポカンとしていた。

「貴様、見ない顔だな、艦娘を狙った犯罪か? それにしては今の攻撃を……」

ようやく晴れてきた砂埃の中から、何やらいかつい緑色の服を来た男が現れる。

「いきなり頭部狙ってぶつぶつ独り言たあ、なかなかいい度胸してんなてめえ!!」

俺は立ち上がりそいつに向き直る。

軍人だ、それも着ている物は旧日本陸軍憲兵隊のそれときた。

「てめえ何者だ? その服装はぶざけてんのか?」





「デエエエエヤアアアアアアアアアア!!!」

「アバーツ!!」

再び自衛官のジユウドウジツにより憲兵哀れな断末魔を上げる!

「サヨナラー!」

はそして憲兵はその場にしめやかに倒れこむ!!

ナムアマダブツ!!

く2067/08/13/04:55 | ひびきく

「え、えつと……誠さん……?」

(謎の) 壮絶なる決闘を唐突に見せられた私(と変態幼女)は何が起こったのか理解できず、とりあえず名前を呼ぶことにした。

「あ……? なんで俺の名前呼んでんだ?」

うう、やっぱり分かんないかあ……

「えつと、その……」

誠さんはこちらに警戒しつつ、憲兵(?)さんの腕から9ミリ機関拳銃を取り上げ、マガジンを抜き取った。

「……1発も撃ってないみたいだな、よし」

そういうとマガジンを再び元に戻して上部のボルトを引いた。

「で、お前、そいつ離せよ、死ぬぞ」

そこで私はようやく気付いた。

「く、苦しい……!」

変態幼女を全力で抱き寄せていた事に。

「うわ!?ごめんなさい!!」

「ぶはっ!し、死ぬかと思った……」

こうみるとほんとに普通の女の子だ、小学生くらいかな?

「……まったく、君達はなんなんだ!! 突然海岸に倒れていたと思ったら……!!!」

両手を＼(o^o^)/みたいに広げながらうーうー唸っているあたり、本当に小学生だ。

「どうもなにも、俺の乗った船が襲われてな。丁度今の今まで漂流してたところさ」

さすが誠さん、淡々と冷静に説明していく

「……船?」

乗った船が、その辺りでこの子は静かになった。

「ん?なんか変な事言ったか俺?」

「いや、変もなにも、どうやって?一隻でかい?」

なにかおかしい事でも言ったかな？

「ああ、海上自衛隊所属、イージス護衛艦「ひびき」だ」

その瞬間、女の子の顔が凍りつく。

その瞬間を、誠さんは見逃さなかった。

「どうした？」

「イージス護衛艦、ひびき……？」

「ああ、ハワイに向けて支援艦隊が出撃して……」

私がそうなの、と言ったらなんだかややこしくなりそうなので、私は黙ってる事にした。

「そんな、いやまさか……」

なによこの子は、急に静かに……

「な、なあそれは本当かい？私をからかっているとかじゃないよね？」

「その必用はない、何が悲しくて嘘なんかつくか」

「じゃ、じゃあひとつ聞いてもいいかい？」

恐る恐る、その子は私達に聞いてきた。

「君達は幽霊か何かかい？」

あんまりにはかおが!!真剣だったものだから、私はかぶりを振った。

「い、一応は生きてるわよ」

「あ、あり得ない、だってひびきは……」

「え……？ いまなんて言った？」

聞こえなかったので、もう一回聞き直した。

「50年前の艦だよ……？」

私の顔が凍りつくのが、自分でも確かにわかった

## 第3艦、響、見つめる者は

「2067/08/13/05:00」誠

どっかに吹っ飛んでいた俺の思考を体に戻したのは、聞きなれた起床ラッパだった。  
「お、おい今なんつった？」

あまりにはぶつとんだ内容だったもんだから、俺は考えるより先に聞き返していた。  
「なにも、イージス護衛艦ひびきは、50年前の艦艇……」

その時、少女が何か腰に手を回そうとしたのが見える。  
「てめえ……!!!」

少女の胸ぐらを掴み上げ、憲兵から取り上げた9ミリ機関拳銃をそいつの眉間に構える。

「誠さん!!」

「い、痛い……!!!」

「もう一度聞く、イージス護衛艦ひびきは、本当に50年前の艦艇なんだな？」

「だか、ら……さつきからそういつて……!!」

「やめて誠さん！苦しそうだから!!」



俺は少女の胸ぐらを離した。

「ゲホッ、ゲホッ……!!」

地面に膝まずきながら咳き込む少女を今度は一才の遠慮なく踏みつけた。

「ぐあ……っ!?!」

「お前、軍人だな? しかもかなり射撃になれてると見たが……」

少女は倒れながら呻いていたが、軍人というワードを聞いて、俺の足から抜け出した。

「……やっぱりな」

こっちの女と喧嘩してるときに時々出てきたロシア語、憲兵が降って来たときに誰よりも早く気付いた洞察力、そして腰につがえていたMP-443 グラッチ。

「В ы р у с с к и й ? (お前ロシア人か?)」

取り上げたグラッチを眺めながら9ミリ機関拳銃を向ける。

「あなたロシア語を……!」

少女は驚きを隠せていないようだ。

目を見張りながら俺に取り上げられたグラッチを見つめている

「М о ж е т е л и в ы П о м о ч ь в а м ? С о м п л е х и о н П л о х о ? (どうした? 顔色が悪いぞ?)」

「ちよ、ちよつと、いくらなんでも無抵抗な子供に……!!!」

でかいほうが言いかけたのを遮って俺は続ける。

「お前、さつき復唱した時に、咄嗟にグラッチを抜こうとしたな？」

でかいほうが驚きの顔で俺と少女を交互に見つめる。

「ど、どうして気が付いた……!?!」

「軍人とはいえ、所詮は人間、行動の前には必ず予兆がある、それに注意していれば簡単  
なこった」

「君は一体……!!!」

「そんなことより責任者に会わせろ、お前じゃあ話にならなそうだからな」

我ながらバツサリ言ったと思う、少女はちよつと傷付いたような顔をした。

「し、司令官なら……」

く2067／08／13／05：15 響 く

なんなんだこの人。

私は久々に恐怖という感情を思い出した。

「し、司令官なら……」

痛み続ける脇腹を抱えながら、なんとか立ち上がろうとするが、思うように立てない、  
足が震えている。

「だ、大丈夫？ほら掴まって……」

そういつて手をさしのべてきたのは、先ほどまで私を変態呼ばわりしていた彼女だ。

「うっ……すまない……」

しようがないので私はその手に掴まった。

「君達は一体なんなんだ……、変態呼ばわりされるわ踏まれるは……」

「アハハ……ごめんなさいね、あの人、そんなに悪い人じゃないの……」

そういう彼女の顔は、嘘をついてる様には見えなかった。

むしろ……

「ん？どうしたの？」

「……!!な、なんでもない」

「……?」

ちよつとだけ、暁を思い出すような、やさしい笑顔だった……

く2067／08／13／05：17 | 誠く

「な、なんだこれは……!!」

俺の目の前に広がるのは、どう見ても地方総監部ではなく、かといつて教育隊や陸時の駐屯地でもなかった。

「な、何つて、第13鎮守府……」

「ち、鎮守府……?」

なにいつてんだこいつ、と正直に思った

「とにかく、1度司令官に……あぐつ……」

「お、おい大丈夫か?」

つい、いつもの癖で反射的に踏んだり蹴ったりしたが、相手はどうやってても女の子だ、さすがにきつかったろう。

でかいほうが背中をさする。

「と、とにかく司令官に話してくるよ、二人にはちよつと待っててもらおうけど……」  
普通こういうのは客間に通すものだが、今は大人しく外で待つことにした。

「わ、私もいくわ……」

でかいほうが一緒に歩いていくらしい

「あ、あなた名前は……?」

ちつこいほうが俺に聞いてくる。

「ん? ああ、豊後誠だ」

「了解した……」

そういつて二人はドアの向こうに消えた。

く2067/08/13/05:18「ひびきく

もう、誠さん、ほんとにやり過ぎ……

おまけに私が「ひびき」だって気付かないし……

「はあ……っはあ……っ」

「司令官さんがいるのどこ？大丈夫？」

「う、うえ……」

2階か。

少女は途中まで私の肩に掴まっていたが、途中から明らかに様子がおかしくなったからおんぶで運んだ。

「先に医務室に言った方が良くない？」

少女は軽やかぶりをふった

「このまま、上に……」

「わ、わかった……」

にしたってなんで誰もいないのよ、さつき起床ラッパが鳴ったばかりじゃない。

起床ラッパが鳴ってから既に約20分だ、この時間なら丁度体操が終わって皆宿舎に戻る頃だ。

「あの部屋？」

私は1つの部屋を指差した。

「うん……」

なにこの子、明らかに様子がおかしい。

誠さんにやられただけじゃない、どう見たって具合が悪い。

「司令官さんになんて説明すれば……」

バン!!

ん？銃声？ああ皆いないと思ったら射撃訓練か。

気にせず私はドアノブに手を掛けた。

く2067／08／13／05：19 | 誠く

くそ、ここの連中は揃いも揃って奇襲訓練でもうけてんのか!!

「お、おい、ちょっと待ってっ！話を聞けよ!!」

俺の目の前にいるのは、またしてもさっきのちっこいのと同じくらい女の子、めばしい違いは真っ黒に近いセーラー服、そして長く白いその髪。

「黙れ!! 貴様さっき響に何をした!!」

どうやら話し合いでどうこう出来そうにない。

「響？あの子響って言うのか!」

俺の乗っていた船と同じ……

「菊月！どうしたの!!!」

また出た、今度は……

「長月!!手伝え!!不審者だ!」

長月と呼ばれた少女だ。服は隣のと同じだが、髪の色は鮮やかな緑だ。

つてか俺もう不審者決定かよ……

「だから!話を聞けよ!!!」

「な、なんか向こうさん事情ありな感じが……」

「響を蹴ったんだぞこいつ!!!」

「……は?マジそれ?」

今度は俺に聞いてくる。

「え、あ、いやまあ反射的に……」

「……ふーん、そう……」

あやばい。俺やばい!!マジでやばい!地雷踏んだ!!

「じゃあ遠慮は一才入らないな」

そういつて俺になんとも特徴的な銃を向けて来る。

「……仕方ないか」

俺はそれだけ言うと動き出した。

「っ……………!!」

菊月という少女は反応こそはしたが、次の瞬間にははっ倒されて俺に銃を向けられていた。

「……………え？」

長月の方は何が起こったのか理解出来ず、思わず銃の構えを緩めた。

その瞬間を見逃さず俺は長月の銃を撃った

「あっ！」

カランカランと軽い音を立てながら銃は向こうに落ちた。

「終わりだガキども、手をあげて降伏しろ」

この間わずか5秒。うん、また短くなった。

菊月には取り上げた銃を、長月には9ミリ機関拳銃を構える。

「お、お前一体……………!!」

倒れたままの菊月が、信じられないといった顔で俺を見つめてくる。

「あ……………菊月……………」

長月の方は銃だけとはいえ撃たれたことが相当びつくりしたらしい、その場にへたんと座りぐったりしている。

「な、長月!!」



「ほらみる、相手の技量も図らず飛びかかるからそうなるんだ」

「ぐ……！長月!!」

菊月は長月に駆け寄った

「つち、おい大丈夫か？」

俺も駆け寄り長月の手を掴む。

「お、お前一体なんのつもりだ……！」

「さつきはお前らが勝手に攻撃してきただけだろうが、だからやむなく撃ったんだよ。

……ほれ、大丈夫だ、手には当たってねえ」

「え、あ、うん……」

「悪かったな、撃っちまって」

俺は膝だちの状態から立ち上がろうとするが。

「動くな」

背後には警戒していたはずだが、いつのまにやら俺の喉元には刀があてがわれていた。

だが、今度は菊月の声でも長月の声でもないようだ

「……背後には警戒していたはずなんだが？」

俺は両手をあげてゆっくりと立ち上がる。

「いやはや、俺も最初はビビったよ、なんせ背中から出ている殺気はんばねえし」

俺？ということは男か？いや、聞こえる声音は完全に女のそれだ

「まあでも……」

おそらく菊月たちの方を向いたのだろう、髪が揺れる音がする。

「ガキどもは気付けないぐらいには抑えてたんだろうな」

女が小さくため息をつく。

「くっ……うるさい!!それよりどうするんだそいつ!」

「……俺に争いの意思はないとりあえず刀をおろしてくれないか?」

「けっ、やだね、あんたおろした瞬間俺を投げるつもりだろ?」

バレていたか、そうなれば仕方ない。俺は動き出そうとした、だが。

パチ、パチ

手を叩く音がして、全員一斉にそちらを向く。

ちなみに俺はギリギリ見えない。

「天龍、刀をおろせ」

「えー、なんだよ提督。せつかく……」

提督?マジでここどこだ?

それにこの声どつかで……

「おろしなさい」

「ちえ……」

そういうと喉元の刀がはずされる。

「大丈夫ですか豊後さん」

「ああ、おかげさまで大丈夫……おいまてなんで俺の名前……」

振り返った俺は言葉を失った。

そして叫んだ。

「西村あああああああああああああああ！！！！」

あの日アスロツクを勝手にぶっぱなした、西村雅人がそこにいた。